

人間本位のバリアフリー空間の創出

「学際的化学反应」を目指すバリアフリープロジェクト

ホームページ：<http://www.bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

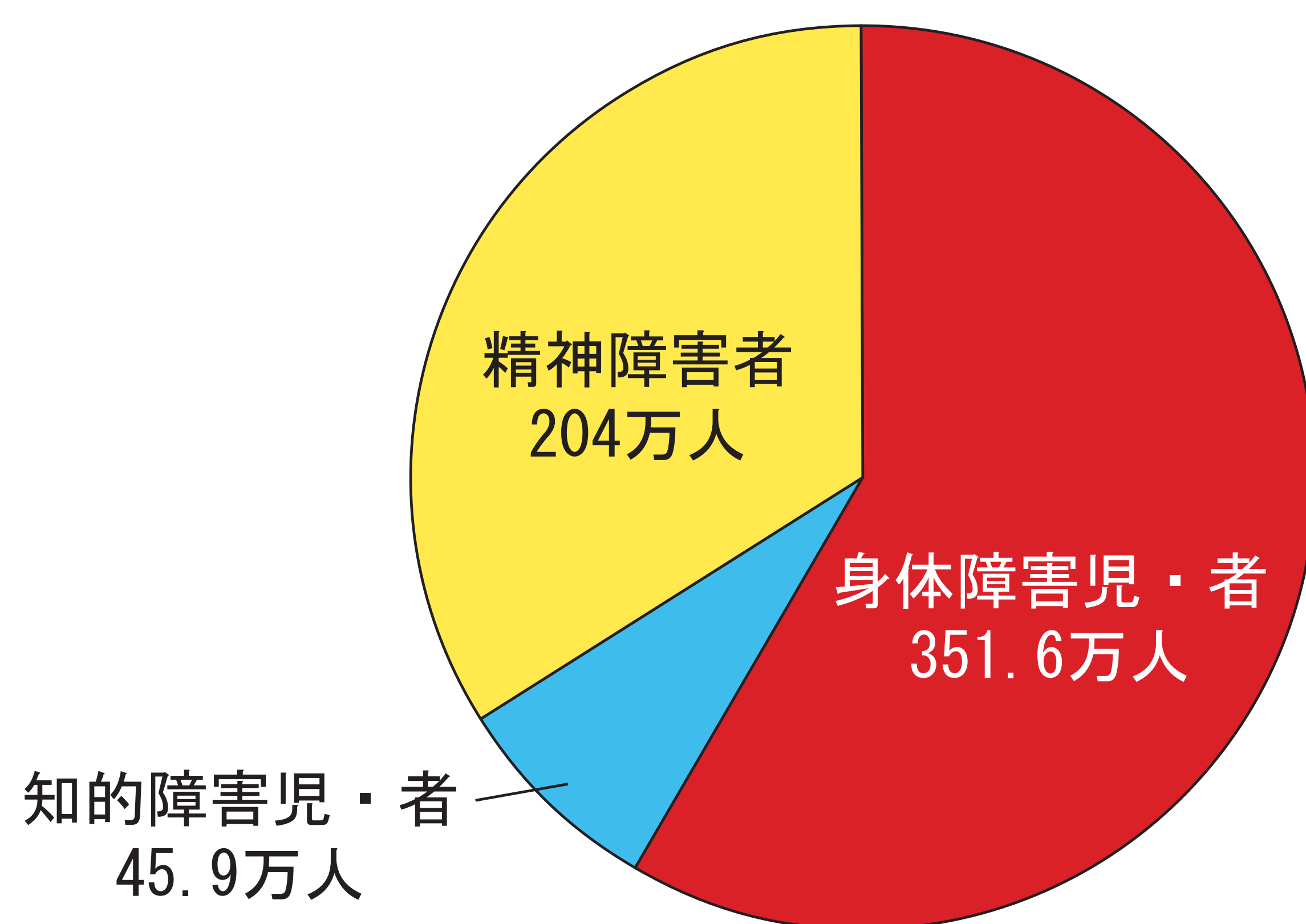
プロジェクトの概要

どんな人も老化して、心身の機能が低下するわけであるから、バリアフリーの問題は、人間全般にかかわる大きな問題である。バリアフリープロジェクトの研究目的は、21世紀社会において、障害者・高齢者を含むすべての国民・ユーザが安心して、安全で快適な生活を送ることができるように、先端的科学技術を有効に応用していく方法を探り、未来の総合的バリアフリー社会空間の構築を目指すことにある。

障害のある人や高齢者にとって最も重要なのは、失われた身体ではなく、生活上の機能を充足させることである。近年、バリアフリーやユニバーサルデザインが注目されているが、ユーザである障害者・高齢者の生活の視点は十分でなく、ニーズとシーズの乖離が見られる場合もある。本プロジェクトでは、「盲ろう」のディレクターをはじめとする障害当事者スタッフ、障害者に寄り添い日常的に支援を行っている研究スタッフが協同し、生活とい

う視点から人間の活動や社会参加を捉え直すことにより、誰もが住みやすいバリアフリー空間を再構築する。

(1)障害を文化としてポジティブに捉え、(2)環境との相互作用で作り出されてしまっている「障壁（バリア）」を除去するという「障害学」の理念に基づき、心理学、社会学、法律学、支援技術等の方法論を用いて、学際的・総合的な視点から人間本位のバリアフリーサイエンスにアプローチしている。また、「障害」に対するネガティブな意識を変革し、社会の一員として障害者の多様性が認められるようにするために、まちづくり等への参画を通じた実践的な研究活動も実施している。そして、これらの研究成果を政策に反映させるために、「公共システムのバリアフリー化に関する研究」（科学技術政策提言）を実施している。さらに、安定したバリアフリー空間を維持するために、産官学連携によるビジネスモデルの形成にも着手している。



身体・知的・精神障害者数
(平成13年度・厚生労働省調査：総数601.5万人)
<http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h15hakusho/sy03-san.html>より改変



ディレクター
助教授 福島 智

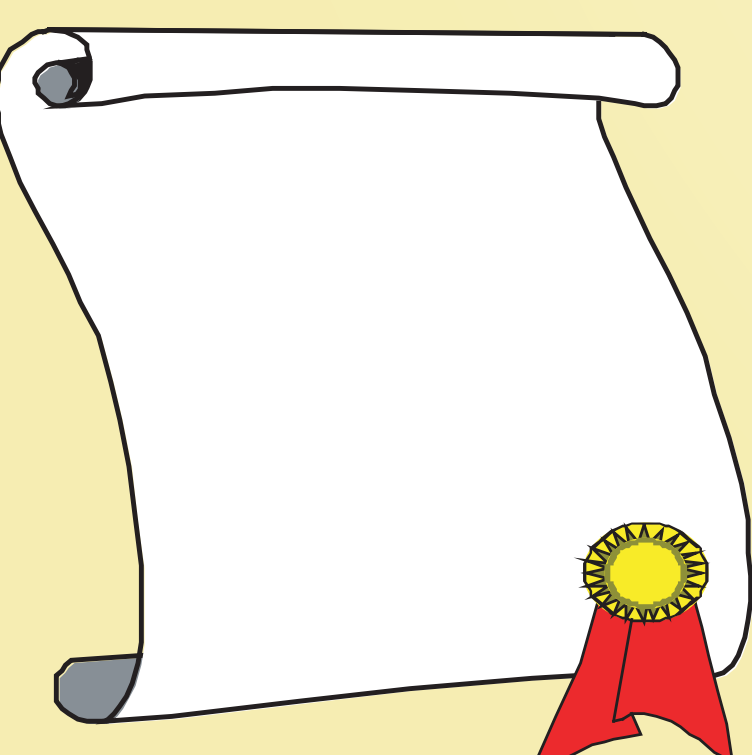
バリアフリーとは？

物理的環境の整備 (物理的バリアフリー)



- ・足が不自由なので階段の昇降ができない！
- ・通路が狭くて車いすでは入れない！
- ・目が不自由なので信号が確認できない！

制度の整備 (制度面のバリアフリー)



- ・障害のために受験や入学を断られた
- ・資格試験を受けたいのに点字での受験が認められない
- ・能力はあるのに就職させてもらえない

文化・情報環境の整備 (文化・情報面のバリアフリー)



- ・手話通訳がないので話の内容がわからない
- ・目が不自由なので新聞等が読めなかったり、絵画や文化遺産を楽しめない

心理的環境の整備 (心のバリアフリー)



- ・仲間はずれにされる
- ・自分だけ避けられてしまう
- ・大変さが適切に理解されない
- ・障害のことをからかわれる
- ・「かわいそう」「気の毒」と勝手に同情されてしまう

研究概要： ユーザの視点を重視した文理融合型学際バリアフリー研究

生活者としての人の視点で学際的バリアフリー研究を展開
(1)道具や人による支援(生活支援技術研究)を使い、
(2)街や人(コミュニティ研究、街づくり研究)の中で、
(3)法律や福祉等の社会制度(制度・政策研究)に基づいて、
生きている存在と捉える

1. 当事者性の理念： 障害学(disability studies)

- ・「障害」を分析の切り口として、人間と社会のリアリティ、科学や文化のありかたを再検討する学問、思想、知のフロンティア。
- ・科学技術が人間と社会にもたらす功罪を障害という視点から分析・考察。
- ・「当事者性」を重視。

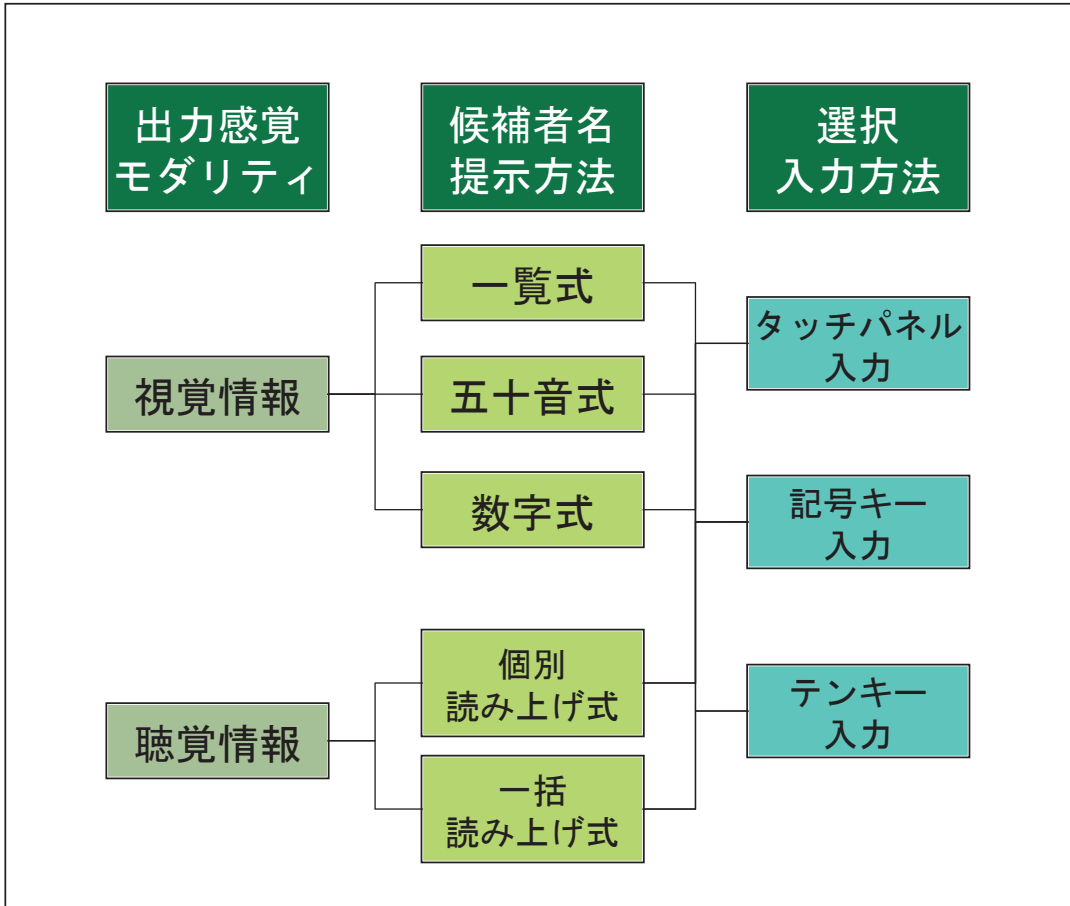
2. エビデンスに基づく支援： 他覚的眼球運動測定装置の開発

障害のある人への支援をエビデンスに基づき、科学的、合理的に行うための研究の一つとして、評価方法に関する研究がある。私たちは、重い障害があり、言葉でのコミュニケーションが困難な場合にも、その人の心身の状態や適切な支援のあり方が評価できる手法を検討している。その一つとして、眼球運動を利用した評価システムの研究を実施している。



3. 機器の使いやすさ： 電子投票機のユーザビリティ研究

- 近年、選挙(特に投票)におけるバリアフリー化の道具として、電子投票機が注目されている。
- 電子投票機の各種インターフェースが、視覚障害者や高齢者にとってのアクセシビリティ・ユーザビリティを確保しているか否かを心理実験法を用いて検討している。
- 最低限のアクセシビリティは確保されているが、使いやすさに関するユーザビリティに課題が残る。



4. ヒューマン・サポート： 支援者・臨床家の熟達化研究

現在、障害当事者や高齢者の支援・介護の多くは人的資源に頼っている。
しかし、人によって支援の適切さ・満足の度合いが異なる。
→ 一般的に、熟達者の方が、「今ここ」にいる当事者のニーズにあった支援を行うことができる
熟達者と素人を比較し、支援者・臨床家の熟達化過程を明らかにしようとしている。
→ 映像を用いた電子情報機器を用いた支援技術の開発やマッチングに適用

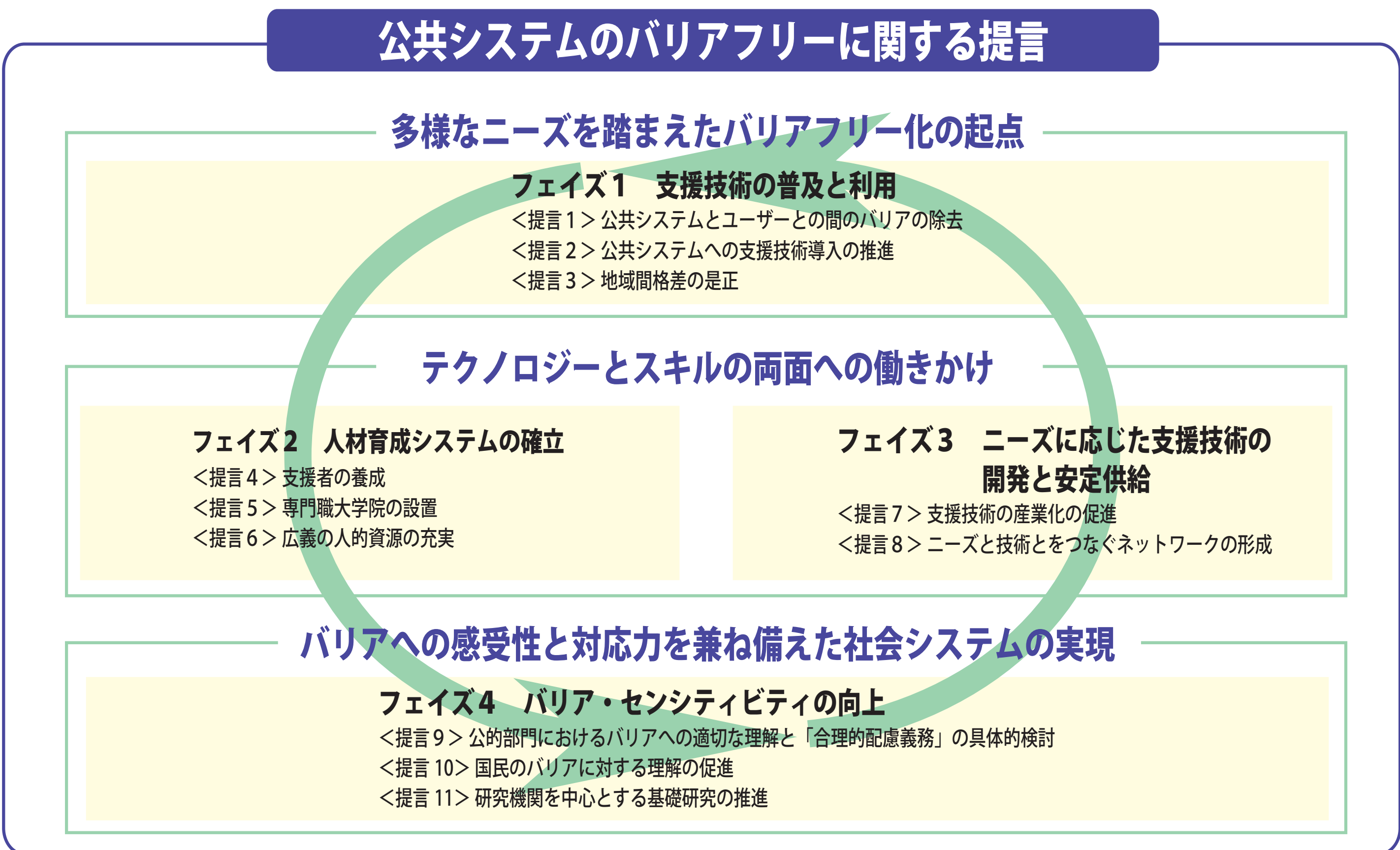


5. 福祉のまちづくり： 誰もが住みやすいまち作りを目指して

- ・多様性を認める快適な空間づくり
- ・まちに息づく人の多様性に「気づく」
- ・生活の文脈で、生活機能上のバリアに「気づく」
- ・当事者がかかわる効果的な方法をアクションリサーチ
- ・誰もが外出でき、様々な人が集い、コミュニケーションができる活気がある「まち」



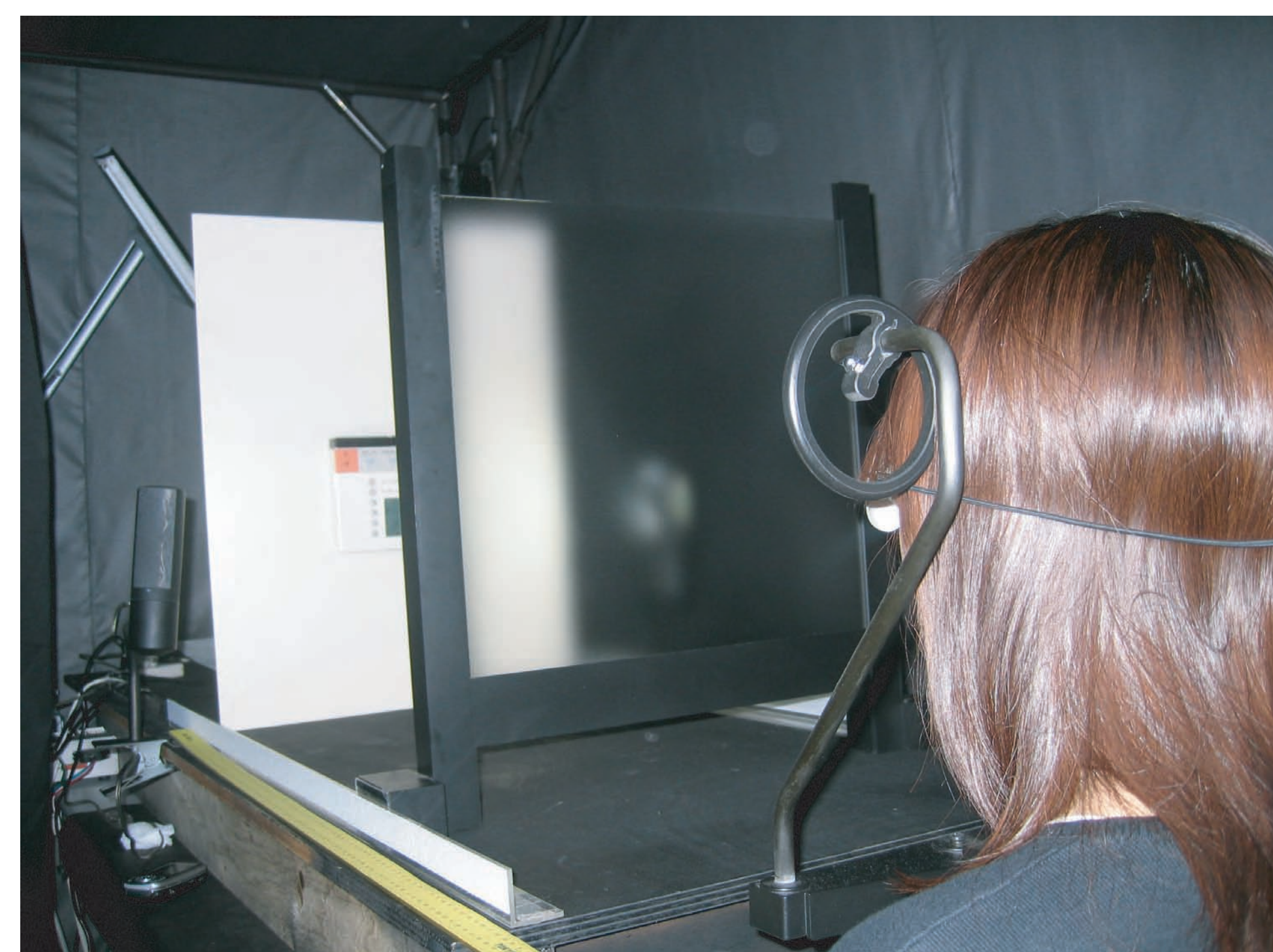
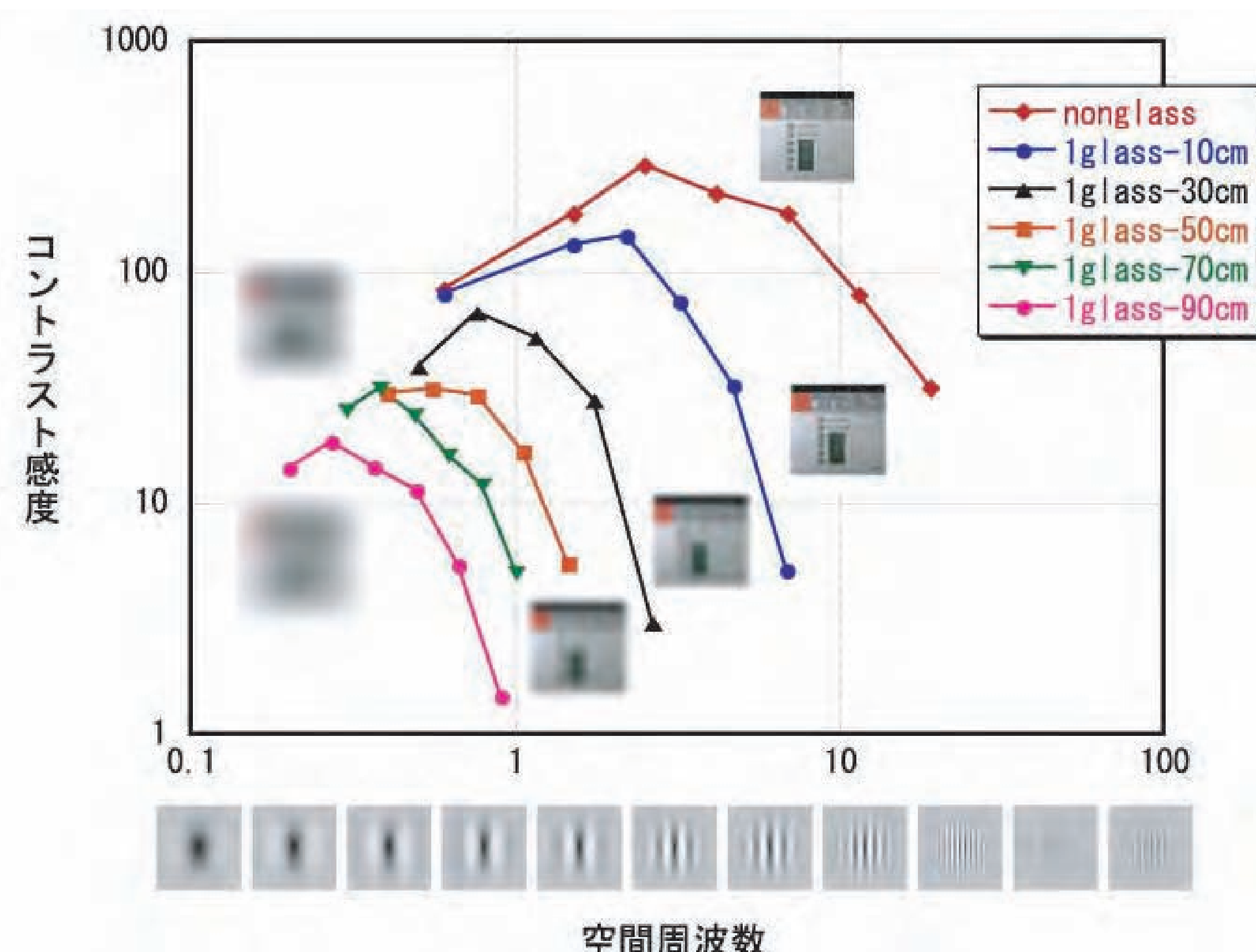
6. 社会システム： 公共システムのバリアフリー化



ニーズを科学し、シーズと融合させる 循環型産学連携システムの構築

みんなが見やすいリモコンデザイン 東陶機器株式会社との共同研究

現在、家電製品は便利で、高機能になっている。しかし、機能の向上に伴い、リモコン等の操作は複雑になりつつある。特に、視覚に障害があったり、高齢のために手元の物が見えにくい人にとって、たくさんのボタンがあり、小さな文字で表示されたリモコンは、必ずしも使いやすくない。そこで、東陶機器株式会社との共同研究では、より見やすいリモコンのデザインについて研究を行っている。



盲ろう者の自立と社会参加を推進する機器開発 K G S 株式会社との共同研究

視覚と聴覚の両方に障害のある盲ろう者はコミュニケーションに大きなバリアをかかえている。盲ろう者がコミュニケーションを取る際は、そのほとんどを通訳など人的なサポートに頼っている。盲ろう者の独力でのコミュニケーションを実現させるため、点字ペーパーレス化のパイオニアであり、世界の点字セルの約70%のシェアを占めているK G S 株式会社と共同で盲ろう者向けのコミュニケーション機器を共同で研究開発している。

